

老人二題

その一 妙見宮(みょうけんぐう)のお婆さん

久しぶりに妙見宮への山道を辿った。

もみじの紅に雑木の黄色や赤茶色が加わり参道はまさに秋たけなわだった。

陽射しがあれば輝いて見えたに違いない。しかし、生憎の薄曇りだった。

幾重にも折れ曲がる坂道を登って行くと人の話し声が聞こえてきた。

最後の角を曲がり、視界の開けたお宮の前に出ると、向こうで話し込んでいるお婆さんと中年の女の人の姿が見えた。

しばらくそこに佇んで息を整えていると、話を終えた女の人が会釈しながら「こんにちは」と声を掛けて坂を下りて行った。

残ったお婆さんは、妙見宮の脇にあるおみくじや絵馬を売っている小屋の番をしている人で、この前来た時にはお茶と煎餅をご馳走してくれた。

今日も「お茶を入れますよ。あがってってください」と声を掛けてきた。

折角なので頂くことにした。

この前と同じように、平井ッ原(ひらいっばら)を見渡せる高台の上に置かれた縁台に腰を掛け、少しぬる目のお茶を啜りながらお婆さんの話に耳を傾けた。

90歳になるというお婆さんは、少し目が霞(かす)むようになってきたが、足腰は達者で、つい最近まで小屋への山道をひとりで歩いて上り下りしていたそうだ。

さすがに近頃は来る時は、息子に車で送ってもらっているが、それでも帰りは、今でもひとりで歩いて坂を下っているそうだ。

まだ耳も達者だし、話しぶりも話しの内容も尋常(じんじょう)で、とても90歳には見えない。腰が曲がっているのは若い頃の野良(のら)での重労働のせいなのだろう。

渋茶色の顔に刻まれた皺(しわ)の一筋一筋に生き抜いてきた年月の重さを感じる。

「100歳になる友達がいる。わたしも100歳まで生きるつもりだ」

とおっしゃる。まだまだ意気盛んだ。

この元気、あやかりたい、老いるならこのように老いたいと思った。

話し相手、と言うより話の聞き手がほしいのだろう。そばにいたいと思い出したようにポツリポツリと語りかけてくる。

「十四年前に妙見さんが出来てからずっと小屋の守をしている」

「以前は毎日ここに来ていたが、最近は参拝者の多い土曜日と日曜日だけにしている」

「妙見さんの周りに組んであるあの足場は、屋根瓦の修理の時に使ったもので、韓国から職人を呼び寄せて仕事をしてもらった」

「お正月の三が日は巫女が出て紅白の餅を配り、甘酒を振舞ってくれる」

「五月には例祭があり、韓国の農楽隊が賑やかに繰り出す」

・・・妙見さんにまつわるお婆さんの話は尽きない。

この前もそうだったが、腰を上げるきっかけが掴めず困ってしまった。

でも、問わず語りを聞いているうちにいつしか小一時間が過ぎてしまった。
思い切って縁台から腰を浮かせ「また来ますよ」と言って別れたが、誰もいない山の中腹に
老婆ひとりを置いていくのは何となく気掛かりだった。
坂の途中まで降りて縁台の置いてある辺りを見上げたが、お婆さんの姿はもうそこには
無かった。茶道具を小屋に運んで行ったのだろう。

メモ

妙見宮は、西多摩郡日の出町の山の中腹にある韓国式の神社です。
韓国から呼び寄せた職人の手になる建物は、極彩色に彩られ、日本の神社には見られない
独特の趣があります。

2004年 秋